

さいがいから人々をすくった見川喜蔵



江戸末期の粕壁宿（推定）

今のかすかべ大通りは、今からおよそ四百年ほど前から東北地方と江戸（今の東京）をむすぶ日光道中の宿場町（旅人がとまるどころ）「粕壁宿」としてにぎわったところで、通りにそって家々が軒をつらねてさかえていました。

この粕壁宿に見川喜蔵という名主（今の村長や町長のような役目の人）がいました。喜蔵は、いろいろな人のうったえをよく聞き、何事も公平に行ったので、多くの人々からしたわれる名主でした。

天明三年（一七八三年）浅間山のふん火によつ

て田畑が火山灰でうめられてしまうというさいがい村をおそいました。遠くはなれた浅間山から春日部にまで灰がふってきたのですから、それはそれは大きなふん火だったことがわかります。ふん火は三か月間にもおよび、浅間山からは、たくさんさんの灰がふり、たちまち田畑をおおいました。田うえを終え、順調にいねが育ってきたころです。野さいももう少しでしゅうかくの時期をむかえるところでした。火山灰におおわれた田畑からは作物がほとんどとれなくなってしまったので、食べるものがなくなつた多くの人々が苦しみました。

このようすを目にした喜蔵は、心をいたため、どうにかしてこまっている人々をすくえないものかと考えました。そこでまず自分の家の米でかゆを作つて食べるものがない人々に配ることにしました。しかし、まだまだ食料が足りないのです、宿内の地主（土地の持ち主）を集めてたくわえてある粟や稗などの雑穀をさし出すよう話しました。さ

いしよはしぶつていた地主もいましたが、喜蔵が熱心にせつとくしたところ、協力してくれることになり、村をすくうことができました。村人たちは、

「なんとありがたい。火山灰に負けず、また田畑をよみがえらせよう。」

と、強く心にちかいました。

しかし、やっと人々のくらしが少し落ち着きを取りもどした寛政三年（一七九一年）、橋が流されるほどの大水が村をおそ



い、古利根川のていぼうがこわれてしまいました。いっしゅんのうちに田畑はどろ水におおわれてしまいました。水がいがまたいっおきるかわからない。みんながいつまでもこの地でく

らせるようになっていなくても村を守らなければ——。

そう思った喜蔵は、自分のさいさんを投げうって古いていぼうの上に土をもって、しっかりとときざき直しました。

ていぼうは、げんざいの県立春日部女子高校の東がわから緑小学校の北がわにかけてきざかれました。

たびたびおそわれる古利根川の水がいから作物が守られるようになった人々は、心から喜蔵に感しゃし、このていぼうを「喜蔵堤」とよぶようになりまし

今では、当時のおもかげがしのばれるゆるやかな坂が「喜蔵堤」としてわずかにのこされているだけです。

喜蔵によつてすくわれた春日部のまちを、古利根川は今日もしづかにゆつたりと流れていきます。

